

ポーランド  
波蘭見聞録

大塚 広介

2017年3月20日、東京・羽田空港よりモスクワ経由で私は無事、ワルシャワ・シヨパン空港に到着した。空港内の税関では私を含めアジアからの旅行者が沢山訪れていた。私の拙い英語で後ろの中国人に尋ねながら税関を抜けると、そこはもう異国の地だった。私はこれまでもタイ、グアム、オーストラリアなど海外には何度か出たが、どれも家族旅行、留学など他人の勧めた旅がほとんどで、完全に自費の個人的な旅行で、しかもヨーロッパに来るのはこれがはじめてだった。慣れぬ地で右往左往しながら待合室に行くと、恋人のエヴェリナが待っていた。今回の目的はズバリ彼女との旅行だ。かくして私の人生初のポーランド見聞録がはじまった。

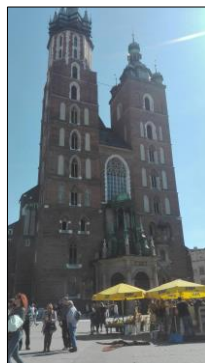
### ワルシャワ

ポーランドでは、まずエヴェリナとワルシャワの街を探索した。ワルシャワの街は都会的な要素も多く日本の横浜や首都圏に近いかもしれない。首都ワルシャワのほかにも、ポーランドには歴史感漂う古都がいくつもある。今回は私が訪れた三つの古都を中心に話したい。

まずワルシャワで一番印象深いのは聖十字架教会だった。大聖堂ではイエス・キリストの彫像やステンドグラスが煌びやかでお洒落な空間を醸し出し、ポーランド人の信心深さを感じさせていた。階段は辛い、時間をかけて自分の足で昇った教会の展望台からは古都を一望でき、ヨーロッパに来たのだと存分に味わうことができた。

エヴェリナ曰く、ヨーロッパでもキリスト教を重んじる人々は年々減っているらしい。最近特にポーランド人でもトルコやアフリカ系の男性と国際結婚を経て改宗する人もいて、教会はこの先廃れていく運命らしい。とはいえ、こういった歴史を感じさせる宗教施設は神社でも、寺院でも、教会でも、モスクでも、後世に残して子供達に正しい歴史を伝えるのに役立ってほしいものである。

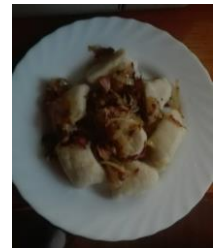
宗教観を感じながら、エヴェリナにポーランドの歴史についていろいろ聞くことができて非常に面白かった。ポーランドは何度も興亡を繰り返しその度に不死鳥の如く復活している。これだけ強国に挟まれた国は世界でも珍しく、ドイツとロシアの中間にあるポーランド以外では、日本と中国に挟まれた朝鮮半島くらいだろう。



ワルシャワを探索して五日後、エヴェリナの実家のあるグダニスクに向かった。グダニスクは港町で、日本で言えば大阪や神戸に近いかもしれない。そこからさらにマルボルク城に向かった。この城はエヴェリナとガイドさんによるとヨーロッパでも最古の部類の城らしく、城内には歴史漂う刀剣や鎧が飾られていて、ポーランドにかつて存在したフサリア(騎兵)から説明を受けた。彼らは「我が国には待にも負けない戦士がいたんだ」と誇らしげだった。

### ポーランド料理

ポーランドは歴史だけでなく、料理も興味深かった。私の一番のお気に入りにはピエロギである。種類によって違うが、チーズや野菜のはいったオカズ系から、クレープのようにジャムやストロベリーが入ったものまで多種多様である。エヴェリナの実家では私がパクパク食べるのを見て彼女の母が目丸くしていたが、ポーランドの料理は非常に日本人の口に合う気がする。日本ではあまり馴染みがないが、日本でもポーランド料理店を大々的に展開すれば流行るかもしれない。



彼女の父からは中々興味深い話が聞けた(私のお粗末なポーランド語のため大分エヴェリナに通訳してもらった)。まずポーランドでは街中に多くのサムソン製のテレビがあり、彼女の家のパソコンは台湾製で、父の自慢の愛車はトヨタとスズキだった。父曰く、日本車はステータスの一部らしい。ポーランドはアジアの企業のEU進出の架け橋なのかもしれない。

### 日本とポーランドの違い

さて、ポーランドを歩きポーランド人と話してみると、日本とは相違点が多かった。まずポーランド人は非常に礼儀正しい。ホテルマンからタクシーの運転手まで明らかに外国人である私にも嫌な顔もせず明るく接してくれる。そして何より、この国は非常に移民が少ない。ワルシャワやグダニスクを歩いてもほとんどが白人系のポーランド人で、アジア系に出会ったのは空港の税関前とグダニスクの寿司レストランだけだった。その後訪れたクラクフでも移民系の人は見られず、ましてや私達のような国際カップルはほとんど見られなかった。しかしこのポーランドの移民への不寛容さは、外国人旅行者にとっては嬉しいことかもしれない、まずポーランドは EU

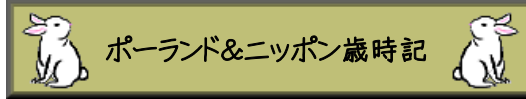
の中でも物価が安く、多くの外国人が気軽にヨーロッパを楽しめ、かつ独自の食文化や景観を楽しめる。国際化と言うと聞こえは良いが、ポーランドや日本のようなある種閉鎖的な国柄は、外の文化圏から来る人間から見れば非常に独創的個性的であり何より面白い。国際化は大いに結構だが、まず自分の文化を守り子孫に伝えるのが一番大切であろう。

かくして私の二週間のポーランド紀行は幕を閉

じた。空港でエヴェリナは別れを惜しみ涙したが、来る12月、今度は彼女のほうが日本に来る予定だ。一体彼女が本物の日本を見て何を感じるか、今から楽しみである。彼女の日本旅行はまた機会があれば皆様にお伝えしたい。

(おおつか・こうすけ、2017.9.30)

写真(上)エヴェリナと筆者(中)ポーランド料理・ピエロギ(下)クラクフ・聖マリア教会



**キノコ狩り**

今秋はキノコが豊作でした。キノコ狩り(grzybobranie)という伝統は『パン・タデウシュ』にも描かれています。私も子供のころに参加したことがあります。後でキノコの「帽子」と「足」に糸を通して部屋に干すと、家中が森の香りでいっぱいになったものです。

zapach dzieciństwa	ビゴス鍋
podgrzybki prosto z lasu	思い出が沸く
w garnku bigosu	キノコ狩り
Monika Tsuda, Poznań	ポズナン市、津田モニカ
kropla po kropli	雨だれの
deszcz rytmu wystukuje	リズムに踊る
do liści tańca	木の葉かな
Piotr Wrzeciono, Warszawa	ワルシャワ市、ピョートル・ヴジェチョノ

老松や冬霨ふゆもやけて龍昇る  
若水やノミ研ぐ鬼師鬼を彫る  
往きし人窓の向かふの雪明り

岩見沢市、霜田千代麿



第19代札幌コンサートホール専属オルガニスト  
マルタン・グレゴリウスさんに聞く

徳田貴子

マルタン・グレゴリウスさんはポーランド・グディニア出身、2017年9月1日キタラの専属オルガニストとして札幌にやってきた。キタラでのデビューコンサートでは即興演奏を含む素晴らしい演奏を披露された。はるばるポーランドから札幌にやってきたマルタンさんの素顔に迫るべく、去る10月23日、初雪が降るなか札幌パークホテルでお話をうかがった。

**行間を読む日本人のコミュニケーションは素敵**

マルタンさんは日本での生活は初めてである。日本といえば歴史ある建物が多いイメージだったが、札幌は予想外に現代的で綺麗な街でびっくりしたという。特に札幌駅と大通り駅をつなぐ地下歩行空間には「寒いから皆さんこちらを歩くのですね」と感心したそうだ。食べ物は「ラーメン、寿司、てんぷら、しゃぶしゃぶなど美味しいものばかりで大好きです。でも、納豆は苦手ですね」とか。

日本人の印象は、大変礼儀正しく良い方ばかりで、日本人の精神性が好きだと何度もおっしゃって

いた。特に、日本人は仕事の上でも「できない」ことを「できない」とはっきり言わないことに気づいて、ヨーロッパの人々はもっと正直に思ったことをはっきり言うけれど、「日本人の行間を読むようなコミュニケーションの仕方は素敵だ」と感じたという。筆者も米国に10年間留学して当初は「No」とははっきり言えず、欧米の方とスムーズにコミュニケーションをとれなかったことを思い出して、意思疎通の方法の違いを「素敵なこと」と受け入れてくださるマルタンさんにとっても親しみを感じた。

**日本の観客には演奏者に対する敬意を感じる**

コミュニケーションの取り方は観客の反応にも現れる。筆者は留学中、アメリカ人の歌手の友人から、ドイツでシュトラウスの歌曲を歌ったら聴衆も一緒に歌いだしてびっくりしたと聞いたことがある。日本のお客さんの反応にも違いはあるのだろうか。

「デビューコンサートでは、最後に《赤とんぼ》や《ソーラン節》など日本の有名なメロディーをふんだ